

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

センター講師研修会

かわらばん 439 号で黒沢尾根の合宿について書いた。なぜ、黒沢尾根で実施したかという理由もそこに書いたが、今日はその理由の一つ、一週前の 1 月 21、22 日に行われた長野県山岳総合センターの講師研修会のレポートをする。今年はこの研修会に参加した高校関係者は、塩川（木曾青峰）、松田（松本県ヶ丘）と小生の 3 名。この講師研修会について、長くセンターの職員をされ、昨年度末に退職された古幡和敬さんは常々「センターは雪崩事故について苦い経験を持っている。それだけに、事故を肝に銘じた上で、雪崩に関してだけはきちんと対応することが使命である。」と言われていた。僕はまだ榎池でこの研修会が行われていた 90 年代から継続して参加してきているが、毎年この研修を通し雪崩に関する意識を新たにしている。近年のバックカントリースキーのブームとも相まって、雪崩に関する研究も進み、新しい考え方で書かれた本などもいくつも出されるようになってきているが、それらを講義と実技、議論を通して体得できる貴重な場である。今年講師はこの研修 3 年目になる国立登山研修所の東秀訓さん。「講師（レベル）の技術向上の研修」を全面に打ち出しながらも、高校指導者としてこれから雪山に生徒を連れだそうと思っている顧問の先生方でも十分勉強になる研修会であった。毎年訴えていることだが、是非多くの先生方に参加してもらいたい研修会である。

2 日間の日程の初日、午前中は、雪崩のおこるメカニズムについての座学による研修。東さんの体験も交えた講義。それを受けて、午後はセンター前の公園でシート搬送技術の研修。いわゆる技術書などを見ると、ほとんどがシートを両サイドから編み上げてくるむ方法を紹介している。しかし、実際にやってみると、要救助者をしっかりとくるんだうえで、真ん中でまとめて、覆っていくという方式の方が、いいように思う。一昨年のかかわらばんでも、写真入りで紹介してあるので、参考にしてみしてほしい。続いては、ビーコンについて電波の特性やビーコンそのものの個体差についての検証を行った。新しい 3 本アンテナのビーコンはやはり性能もいいことが実際に証明された。またビーコン捜索の際、どのような向きでビーコンが埋まっているかで電波の出方が変わることを、ピープスから出ている捜索機能付きのプロープの紹介なども目新しかった。しかし、私も含めて、世の人間の多くは無尽蔵にビーコンに金をつぎ込めるわけではない。そう考えれば、とにかく自分の手に入れたビーコンをとことん使いこなせるよう雪のあるなしにかかわらず、熟練することが必要であると思わされたことである。

実技研修を終えた後、センターに戻って班別協議に移り、本日の内容についてそれぞれの問題の洗い出し、また翌日の研修に向けての意思統一や課題の共有などを行った。

2 日目は、鹿島槍スキー場と黒沢尾根での実技研修となった。最初に暫く時間を取り、昨日やったシート搬送の再確認。とにかくこういうことは自分の手で回数多くやってみることが実際の場面で生きてくる。我々の班は 5 人だったが、全員が要救助者を体験、少しずつ役割を変えながら、全員が自分の技術として習得することを目指した。その後、ビーコンを使って雪崩捜索訓練を行った。訓練は 2 班合同で行い、一方の班が訓練する

様子を他方が詳細に記録し、それを互いに評価し合うことで、より実践を深めるという形で進めた。下記の表は、実際にそのとき我々が記録したものである。マニュアルがあるものではないが、訓練を重ねていくことで、実際の場面のシミュレーションができる。記録については東講師になってからずっと同じフォーマットで行っているが、単なるデータの蓄積ではなく、実際に去年のものなどと比べてみると、時間短縮はいわずもがな、それだけでなく中身も変わってきているのは明白である。

埋没者捜索訓練記録表				
研修会名		山岳総合センター講師研修会		
日時		2012/1/22		
場所		鹿島積スキー場上部黒沢尾根1620m地点		
捜索人数		4名		
設定埋没者数		2名		
雪崩現場想定	6名で雪山登山中に2名が雪崩に巻き込まれる。全員がビーコンを装着。メンバーより消失点・巻き込まれた人数等の情報を得ることが出来る状況。雪崩の幅は30mであった。			
所要分秒	発生事象	埋没者A状況	埋没者B状況	
0"	雪崩発生。	ビーコン装着のまま流される		
0"20	消失点の確認、捜索態勢の確立。			
0"30	全員サーチモードに切り替え			
1"20	捜索先頭2人雪崩走路の両側を下る			
1"40	見張りが県警救助隊に救助要請無線			
1"50		ビーコン反応あり		
2"00	遺留ストック発見			
2"10	見張りより2次雪崩の通報（ホイッスル）			
2"30	待避解除（ホイッスル）			
2"30		クロス法開始		
3"00	ブローブ用意（3名）スパイラル法開始			
3"10	見張りより救助要請できた旨報告			
4"30	2度目の雪崩発生（ホイッスル）			
4"45	待避解除（ホイッスル）			
5"05	リーダーより、下側から掘る旨指示	ブローブヒット		
5"30	見張りより経過時間報告			
5"30		発見		
5"50		掘り出し完了気道確保		
6"30		安全地帯に移動ビーコン切る		
7"00	リーダーサーチモード確認指示			
7"30			ブロービング開始	
11"00			ブローブヒット	
11"20			発見、気道確保	
12"00			安全地帯に移動保温	
12"30	救助終了			
12"30	見張りより県警救助隊に連絡			
捜索活動概況	雪崩発生から、捜索態勢の構築、それぞれの役割を明確にしての捜索活動、救助までの一連の流れをメンバー全員が共有してスピーディに行うことができた。見張り役の救助要請なども的確であった。ビーコン反応をもとに全員でまず1名を救出、その後、2人目の捜索を行った。			
良かった点	リーダーの指示が明確であった。 メンバーが役割を理解して動けた。 見張りの指示、見張りからの救助要請なども手際よく行えた。			
改善点	ブローブの組み立て方法に精通することが求められる。 遺留物について、その下部に埋まっている、もしくはその下流に流されていることを理解して捜索すればより早く救出ができたのではないか。			

2日間の研修の最後は、雪の性質についての観察。このところの寒波襲来で日本海側を中心に大雪が降っているが、この研修会が行われた段階では、雪の量は例年の半分にも満たない状態で、100cmほどであった。特に顕著な弱層が見られたわけではなかったが、積雪がその数日前から続き、注意を要する状態ではあった。・・・まあ、そんなわけでここで研修したことを参考に、前号で述べたように、翌週高校生を連れて実践的な訓練登山を安全に実施することができたわけである。